

セックスワーカーは場所を要求する!

台湾・日本・韓国

アジアセックスワーカーアクションワークショップ報告書

主催●COSWAS 開催日●2015年12月17-20日 開催地●台北



報告書目次

「プロローグ・台湾と日本のセックスワーカー運動の連帯が20年続いている理由」(要友紀子・SWASH)

「立ち退きを迫られているセックスワーカーの労働場所の風景」(台湾・COSWAS)

「黄金町の歴史と現在」(日本・松沢呉一)

「韓国における売春政策とセックスワーカーの権利」(韓国・Giant Girls)

「エピローグ・東京で経験したこと、台北で体験したこと」(松沢呉一)

プロローグ

台湾と日本のセックスワーカー運動の連帯が20年続いている理由

文・要友紀子 (SWASH)

台湾と日本のセックスワーカー運動の連帯の歴史は1997年からなのでもう約20年近くになります。これにはのびきならない理由があります。

1997年9月、陳水扁市長(当時)により台北市の公娼制度が一夜にして廃止され、それまで合法的に働いていた128名の公娼のライセンスがいきに取り消されました。廃止決定から1年半がたった1999年1月になって、暫定的処置として転職のための2年間の猶予期間を設けるという法律が公布されましたが、2001年3月に公娼制度は名実ともに廃止されることになりました。

この間、公娼たちとその支援者のグループCOSWAS(Collective of Sex Workers And Supporters=台北市日日春關懷互助協會)は、セックスワーカーが生きのびる道を模索して、「一般社会」の人々がセックスワークについてより深く理解し、共存の可能性を探ることができるよう、セックスワーカーによるフィルム・フェスティバル、シンポジウム、コンサート、ロビー活動等を実施してきました。こうした企画に、たびたび海外のセックスワーカー団体の連帯支援も加わって、元公娼たちを含めた市民の間で、台北市における現実的な性風俗産業の在り方が話しあわれてきたのです。

台北市の公娼制度廃止は、「近代的で」「進歩的な」社会をめざすという目的で行われており、日本の売春防止法

が参考にされているといわれています。今現在、台北で起きている都市開発と旧公娼館立ち退き問題も、日本の黄金町がお手本にされていると聞き、改めて、日本でも売春防止法や、歓楽街における浄化作戦が、より脆弱な立場であるセックスワーカーを困難な状況においやってきているということを、台湾と日本の問題として、広く人々に知ってもらわなければいけないのです。

今回2015年12月の台湾COSWASの呼びかけで行われた都市開発とセックスワーカーの人権がテーマのワークショップでは、黄金町の歴史と現在に詳しいライターの松沢呉一さんに報告をお願いしました。COSWASは現在、セックスワーカーの中でも、特に抑圧を受けることが多いストリートセックスワーカーの支援に力を入れているので、街娼の専門家でもある松沢さんに行ってもらったのはとてもいい組み合わせでした。

この台北での国際ワークショップの前月には、韓国でもアジアセックスワーカーフォーラムが開かれており、そこではさらに詳しい韓国の状況報告が共有されたので、後日発行する韓国の会議報告書もぜひご期待ください。

このような大変意義ある会議を準備し、多大な労力をかけて実現してくれた台湾と韓国の仲間たちに感謝と敬意をこめて。



セックスワーカーは場所を要求する!

—台湾・日本・韓国—

アジアセックスワーカーアクションワークショップ

主催●COSWAS 開催日●2015年12月17-20日 開催地●台北

報告:1 COSWAS 台湾

(日日春關懷互助協會 <http://coswas.org/>)

「立ち退きを迫られているセックスワーカーの労働場所の風景」

●文萌楼とは

今日の報告の主題である歸綏街(グイスイジェ)の文萌楼は、セックスワーカーの仕事の場所であった旧公娼館で、同時に台湾のSW権利運動の象徴でもあります。たくさんの人々がここを訪れてきました。ここで仕事をするセックスワーカー、客、そして運動を支えてきた人の中にはストレートもいれば、セクシャルマイノリティもたくさんいます。客の層は、労働者階級が中心で、なかには障害者もいます。ここでは、数え切れないくらいたくさんの出会いがありました。

●セックスワーカーの労働の歴史を象徴する文化財

文萌楼は、建物が特別に綺麗だとか、有名人が住んでいたとかいうが普通の文化財とは違って、何の変哲もない古い建物にしか見えません。私たちは運動を通じて台北市当局にここを文化財として登録させ、今後も残していけるように努力してきました。その際、文化財登録の理由となったのは、ここがセックスワーカーの労働の歴史を象徴する数少ない残されたかつての公娼館であるという点だけでなく、

また公娼廃止反対運動を通じて、台湾のセックスワーカーの運動が興ったという歴史的意義でありました。しかし、今文萌楼には、旧街区の再開発という危機が訪れています。

●押し寄せる再開発計画

これは、文萌楼があるブロックの再開発計画の青写真です。これは建設会社が作成した3Dモデルです。このように高層マンションに立て替えて巨額の利益を生む計画です。そこで犠牲になるのが社会的弱者であるセックスワーカーの生存権とCOSWASの活動です。セックスワーカーとCOSWASは、この新しい街の風景には目障りだとされて、文萌楼を買った土地投資家とデベロッパーは、COSWASに



ここから立ち退くように求めました。

●セックスワーカーと一緒に運動、選挙にも立候補



文萌楼以外にも以前COSWASはもう一軒の春鳳楼という旧公娼館を使っていました。この公娼館でかつて麗君さんも働いていました。右側の一角は、現在再開発されてしまいました。この写真は、2002年に王方萍(ふあんぴん)さんが台北市の市議会議員に立候補した際の様子です。王方萍さんの向かって左側に立っている人も元公娼の官姐さんです。かつてCOSWASは旧公娼の赤線地区でセックスワーカーと一緒に運動して、その一環として選挙に立候補し、地域においてセックスワーカーの仕事の権利を訴えてきました。でも、こうした光景はもう過去のものになってしまいました。

●変わり果てた赤線地区の現在の様子

この写真は一枚前の写真と同じ場所の現状です。右側の部分は既に新しいビルに建て替わっていて、かつて運動の舞台だった時の面影は全然残っていません。ここにも再開発の波が押し寄せてきているのです。



左が2002年のときの春鳳楼の様子で、右が現在の様子です。建物自体は今でも残っているけれども、かつて公娼

館だったことはわからなくなっています。そればかりか、ちょうどここが再開発事業を請け負っているゼネコンの出張所になってしまっていて、この一角ももうすぐすると撮り壊れられて新しいビルになってしまうことがわかります。

●再開発で得する人々の利益

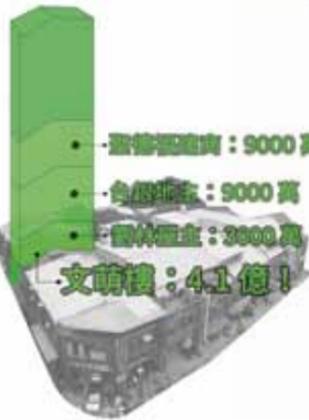
再開発というのは誰のためでしょうか。文萌楼のこの敷地を再開発することによって得られる利益は2億1千万台湾元にも上り、それを建設会社、土地所有者、上物所有者で分割することになります。それに加えて、文萌楼を文化財として保存する見返りとしての容積率追加分の利益は2億台湾元で、これはこの一角の再開発参加者全体で分割されます。COSWASが見積もったこのブロックの再開発によって得られる利益の試算では、この文萌楼のわずか20数坪が4億1千万台湾元もの巨大な利益を再開発によってもたらすこととなります。これまでずっと、文萌楼を運営してきたCOSWASは、こういった再開発のマネーゲームの犠牲となって、文萌楼の文化財的な価値やこの場所がもっているスピリットがないがしろにされようとしています。そして、COSWASは文萌楼から追い出されようとしているのです。

●土地転がして儲ける土地投機家、不動産投資家たち

再開発や土地転がして利益を得ているのはどういった人でしょうか。

画像の一番左側は、国民党の大統領候補。この人は上流階級の出身で、たくさんの不動産を持っていて、そこから巨額の富も得ています。それだけでなく、権力の中枢も把握しています。

二番目は、民進党の大統領候補です。この人は、お父さんが商売で成功して、その資産を土地取引を通じた財テクでさらに増やしてきました。土地を買いこんで値上がったから売ることによって4000万台湾元以上も儲かりました。三番目が、文萌楼を買った不動産投資家。この人は、文化財に設定されている容積率の移転による利益獲得の方法に詳しい土地取引投資の達人です。文萌楼を安い値段で買い叩いて、そしてCOSWASを追い出して、建設会社



セックスワーカーは場所を要求する!

ー台湾・日本・韓国ーアジアセックスワーカーアクションワークショップ



と共同で巨額の利益を得ようとしています。

四番目は、国民党の副大統領候補。この人は、弁護士で、副業で不動産投資をしましたが退役軍人の人に割り当てられたマンションを安く買って転売することでたくさん儲けました。

一番右側は、こういった土地投機とは無縁の一般市民です。私たちの父母の世代は田舎から台北に出てきて、頑張って仕事をする事で自分の家を買うことができました。でも今では台北の不動産は完全に投機の対象とされてしまって、価格が上がりすぎたためにそれこそ一生飲まず食わずで働いてもマンション一部屋満足に買うことができません。生涯の給料をつぎ込んでもトイレ一つが買えるくらいのお金ではないです。

私は昨年里長の選挙に立候補しましたが、その過程で文萌楼の問題は、町内から一国全体にまで及ぶ各レベルの政治家・選挙立候補者の本質を見抜くことができる象徴的な問題であり、一つの試金石であるといえる確信しました。

COSWAS は、国民党・民進党両党の大統領選挙本部に行き質問状を突き付けました。しかし、双方の反応とも芳しいものではありませんでした。国民党は厚顔無知なことに、文化財を土地投機の対象にするのは好ましくないと声明し、市議会の国民党会派を通じて市役所の動きに目を光らせていくといいました。民進党は、のらりくらりとした態度で質問にちゃんと答えず、比例代表候補者の連絡先を伝えるだけというらしい回し状態でした。

●柯市長の公約違反

昨年、柯市長が選挙に立候補した際、選挙対策本部長の姚立明氏は、現在の国民党市政の下で、文萌楼の所有者が文化財の保存と活用について、適切な計画を示せない場

合、市で強制収用することもありえるという政策が進められているが、もし柯文哲が市長に当選したらどうなるのかというマスコミの問いに対し、「あらゆる政策の再検討があり得る」と発言したので、文萌楼の保存のための強制収用も視野に入れた既定の政策方針についての考えを市長候補本人に迫りました。



このアクションは功を奏し、投票前日には柯文哲のブレーンの一人が COSWAS を訪れ、文萌楼について再開発事業自体を公共化したり、文化財の強制収用を行うこともありえるということを公約しました。



柯文哲は選挙前には文萌楼だけでなく、その他の文化財の保存・再活用について積極的な態度を示していましたが、当選後はこれらの公約を忘れたかのように、文化財保護をないがしろにしています。例えば選挙期間中には保存を検討するといっていた瓶の王冠の工場が取り壊されました。それに対して保存を訴えてきた市民団体は強く抗議しました。

●里長と文萌楼の家主との癒着

昨年の統一地方選挙では、文萌楼と COSWAS 事務所が位置する里(町内)の責任者=里長(公職)の選挙に COSWAS の専従スタッフが COSWAS を代表して出馬しました。それまでの選挙では長らく対立候補のいなかった現職の里長は激怒し、「COSWAS と文萌楼が存在することで子供の教育に悪影響を及ぼし、地価の値上がりの足を引っ張っ

ている」というキャンペーンを張りました。また、誰かに COSWAS 事務所を買い取らせて COSWAS を追い出そうと言い出しました。

その選挙に先立って里長は様々な「住民サービス」を行っていました。例えば、お盆のお供え物としてお米を配ったり、忘年会やお盆のお祭りのビンゴ大会の景品として自転車を用意したりしていました。実はそれらは文萌楼が建つブロックの再開発を進めるデベロッパーから提供されたものでした。この里長は元々 COSWAS の活動にあまり良い顔をしていなかったのですが、デベロッパーから利益を供与されて COSWAS に対する攻撃の急先鋒としての旗幟をますます鮮明にしていったのです。

そして、選挙で現職里長が当選してからは、文萌楼からの COSWAS 追い出しについて、文萌楼を地上げしている家主とともにはっきり主張しました。里長は、記者会見を行なって、文萌楼の文化財登録を抹消するように求めました。



●台北市文化局が黄金町のキュレーターを招聘

また、台北市役所において各地の里長と市長が意見交換をするための座談会がおこなわれた際には、「文萌楼は取り壊して記念碑だけを設置するか別の場所に移築して博物館にするかでもして、この町から性産業の痕跡を消し去って全面的な再開発を行い、アートなどのクリーンな産業を呼び込みたい」と主張しました。

そして里長は、地元町内で文萌楼の文化財指定取り消しを求める署名を集め、市に提出しました。それを受けて台北市文化局は「横浜の黄金町のケースを参考にしてアートによるまちづくりの可能性を探る」と称して、黄金町に参画してきたキュレーターを台北に招待して文萌楼を見学させました。

●文萌楼が体现している価値

不動産投資の利益追求のために社会の底辺の性産業とセックスワーカーが犠牲にされてしまうのはよくあることですが、文萌楼もまさにそうしたケースの一つです。

文萌楼は、セックスワーカーの労働の歴史にとっても、また台湾におけるセックスワークの権利運動の経験にとっても、かけがえのない歴史の生き証人であり、文化財に指定された際にもその点ははっきりと確認されました。今後も皆で守っていく必要があります。

文萌楼が体现している価値は、詳しく言うと以下のとおりです。

1. セックスワーカーの労働権：セックスワーカーの社会に対する貢献を世間に認めさせ、あるべき尊厳を取り戻す
2. 脱スティグマを实践する社会的な対話空間：セックスワーカーに対するスティグマをなくすために、皆が自らの性に向き合い、誠実に議論しあうことができる場所
3. 一般庶民の労働史：文萌楼で語り部である元公娼のおばさんの話を聞くことで、普段家庭内ではあまり語られることのない、労働者階級の労働経験を自分たちの歴史として再発見するという出会い



セックスワーカーは場所を要求する！

ー台湾・日本・韓国ーアジアセックスワーカーアクションワークショップ



●元公娼のおばさんの話

文萌楼は、私たちがセックスワーカーとして働き、そして権利を主張

してきた誇るべき歴史を象徴すべきかけがえのない場所だ。体を張ってでも守っていくつもりだ。一部の人たちは「こんなものは博物館の中にしまいこんで子供たちの目に触れないようにしたほうがいい」などと主張しているが、それは大間違いだと思う。セックスや性産業に関する博物館は世界各地にあるようだが、セックスワーカーが自ら案内役を務めているのは世界中でもここだけではないだろうか。以前国際会議でオランダに行った時に、そこのセックス博物館を見学したことがある。入場料がとても高いうえに、音声ガイド用の機械のレンタルも別料金だった。それに引き換え、文萌楼は入場無料であるばかりか、機械じゃなくて生身のワーカーがガイドまでしてくれる。こんな素晴らしいところは、世界中どこを探してもないだろう。

これまで COSWAS が文萌楼でさまざまなイベントをおこなった時に、自分たちの経験や歴史について紹介してきた。そのたびに皆強く関心を示し、満足してくれた。また、大学生がレポートを書くために文萌楼の見学に来たことも数え切れないくらいあった。学生たちはとてもまじめに話を聞いてくれた。今までで一番印象に残っているのは、小学校の先生が生徒を社会見学に連れてきた時のことだ。その先生は用意周到で、保護者も連れてきていた。それぞれに事前学習をおこなっていて、子供も親も文萌楼のことをとてもよく理解していて、いろいろ鋭い質問をしてきた。そして、見学の経験を学校や家庭での性教育にも活かすということだった。とてもすごいことだと感心した。文萌楼はこういうすごいことも起こる可能性を秘めているすごい場所だからなんとんでも残していかなければならないのだ。

●セックスワーカーのミミさんの話

誰にもセックスが必要な時があります。昨年台湾で地下鉄の通り魔事件がありま



した。人を殺してしまった少年が、もし通り魔事件を起こす前に自分に会っていたら、その子の心の問題も解決できたと思います。

セックスワークが非合法とされているので仕事のストレスがおおく精神科にかかって薬ものんでいます。だから精神障害者の人たちの気持ちもわかります。精神障害者に対する差別はひどいけれども、本当は普通の人と変わらないです。身体障害者も差別を受けています。

セックスワーカーは自分で、サービスできるお客さんとサービスしないお客さんを分けることができます。セックスワーカーが通常サービスしないお客さんというのはお酒を飲んでもお客さんと身体障害者です。普通のセックスワーカーが身体障害者にサービスしたがるというのは、警察の手入れがあったときに逃げ遅れることを恐れているのと、介助が面倒だからです。それに身体障害者、たとえば脳性まひの障害者は手足が自由に動かさずぶらぶらさせています。それを知らない人は、暴力をふるわれるのではないかと怖がります。私も初めて会ったときは怖かったです。

私も障害者に初めてサービスするとき緊張しました。障害者にサービスする以前から、私は老人にもサービスしたことがあります。老人は体は弱いけど心は元気いっぱいでした。でも体が不自由で寝たきりなので、オナニーをすることもできず、情緒不安定になりがちです。今の台湾の社会ではセックスそのものに対するスティグマがひどくて、介護をする人がそういう問題に直面しても解決することもできません。性を取り巻く環境が当事者と介護者の双方にとって大きな負担となっているのです。

私が障害者にサービスするのは、台湾社会で障害者のためのそういう場所がないからです。4年前に COSWAS に知り合い、障害者のコミュニティにも知り合いました。そして、

障害者たちも普通の人となら変わるところがないとわかりました。障害者は乱暴で見境がないとか、精神が薄弱だとかという偏見を私も抱いていましたが、そうではないと今ではわかりました。単に体が不自由で性的欲求を満たすのに自分でオナニーすることもままならないので、セックスワーカーのサービスを必要としているのです。

COSWAS の街頭行動での演説

2016 年の国会議員総選挙で鄭村棋さんが人民民主陣線の代表で立候補登録をしてみんなで一緒に合同で選挙に参加します。COSWAS の専従二人もその中のメンバーです。

街娼のセックスワーカーたちは貧しくて売春しないとやっていけません。だから柯文哲台北市長が本当に進歩的というなら、セックスワークのゾーニングエリアを早く設定してください。私たち身体障害者も買春をしたいです。だから台北市長は私たちが合法的に買春できる環境を早くつくってください。

●首都進歩大連盟という政党名を銘打っています が、全然進歩的じゃないです！

このところ、野党の民進党と柯文哲台北市長は、台北市において、二大政党以外の第三勢力をまとめるために、民進党が立候補者を出していない選挙区において、首都進歩大連盟（またの名前を首都改革陣線）という枠組みを作りました。その首都進歩大連盟の中にはいろんな小政党の立候補者が含まれています。これは 2016 年の総統選挙、国会改選の W 選挙において民進党および新派勢力が多数を獲得するための戦略です。現在選挙の投票日が差し迫っている中で、無所属の台北市長柯文哲氏もまた、民進党や小政党の候補者の選挙応援を積極的にしています。ですが、これは 3 か月前に、市長自身が 2016 年 1 月の W 選挙に際しては 4 つのノーがあると言っていたことと完全に矛盾しています。それは台北市長として中立的な立場を守るために、テレビに出ない、ラジオに出ない、応援演説をしない、街頭にでない、こういったことを承諾していました。しかしながら、現在柯文哲市長は、自分でこういったことを言ってお

きながら民進党推薦の立候補者の応援演説に立っています。そのことについてマスコミから、「4 つのノーに反しているのでは？」と質されましたが、柯文哲台北市長は、「私は候補者の応援をしているのではなくて、候補者についてるだけです」という、人を食ったようなそういう言い方をすることで記者からの質問をはぐらかしました。（※中国語で飲み屋さんで女の子がつくという言い方と応援の部隊につくという言い方が似ている。）

この間、柯文哲市長が政党の国会議員の立候補者の応援演説をがんばっているのとは裏腹に、台北市長として本来果たすべき責務のほうは逆でないがしろにされています。そのうちには、文萌楼の文化財が不動産投機の対象にされてしまい COSWAS が追い出されようとしている問題、台北市における売買春の合法化の問題ももちろん含まれています。

さきほど取り上げました、柯文哲市長の、「私は候補者の応援をしているのではなくて、候補者についてるだけです」という言い訳ですが、この言い方というのは、柯文哲市長が売買春という課題にちゃんと向きあっていないというだけでなく、記者の質問に答えるといった場面でも、日々の生活のために頑張っているセックスワーカーを消費する態度として批判されるべきものだと思います。

●セックスワーカーを消費する態度を改めてください！

こういった柯文哲市長の態度や物言いというのは、今から 3 か月ほど前に、台北市政を大きく揺るがす事件となった、台北市の地下鉄台北メトロで使われている電子マネー、IC カードの絵柄をめぐる事件の繰り返しであるということが

できるかもしれません。この電子マネー IC カードの事件というのは、台北メトロの IC カードで日本の AV 女優である波多野結衣とコラボした限定版が発行されました。このことが台北のフェミ団体や保守系団体から抗議を受けました（※IC カードを発行している台北市の外郭の会社の CEO が更迭される結果になった）。この際にも柯文哲市長および台北市役所は、この AV 女優が十分話題性を持っていて、IC カードの商業的な

セックスワーカーは場所を要求する!

利益に与することが大きいということを知りながら、政治上の問題とわかったらすぐ切り捨てました。これはセックスワーカーを消費する態度を如実に表す問題であり、セックスワーカーの問題に正面から向き合おうとしない、そういう態度であると言えます。

私たちは、国の ; 法律で定められている通りにゾーニングを実施して、現状の実質的には非合法であるという状況を打破し、改善してくれるよう改めて要求していますが、しかし現実には、「立候補者についているだけです」発言や、AV女優波多野結衣の IC カード事件からもわかるように、一貫してセックスワーカーを消費しつつそのスティグマをさらに強化していると言えます。

現在の台北市における様々なマイノリティの立場に置かれている人々の状況をちゃんとみなさい! 街娼の人は非常に困窮して売春してがんばっています。障害者の人も買春をしたいです。柯文哲市長が本当に進歩的ならゾーニングを一日も早く実施してください。

●ミコさんの不当逮捕に抗議!

柯文哲市長はこの間、自分が支持する国会議員候補の応援演説に飛び回っていますが、そういった中で、この間、長い期間にわたって、台湾においてセックスワーカー権利運動の中で当事者として第一線に立ち、自分と同じ立場に置かれている街娼のためにがんばってきたミコさんが、2015年10月にネット上で自分の商売の広告を載せたことが、台北市警察局万華区昆明街派出所の警官のおとり捜査によって、児童及び少年の売買春防止法 29 条に違反しているということを理由に逮捕され、しかも検察に送検されました。現在起訴される可能性が非常に高いです。もし起訴されて有罪判決が下されると最高で 100 万台湾元 (約 350 万円) の罰金を課される可能性もあります。この事件は、ミコさんは「18 才未満は見ないでください」という 18 禁の Web サイト上において、セックスワークの広告を出していました。警察はこの広告が掲載されているサイトが 18 禁であることをもちろんわかっていながら、客を装ってミコさんに携帯の SMS メールで予約の連絡をいれました。そして現場で現行

犯で、この広告を載せた広告主であるということでミコさんを逮捕しました。これはおとり捜査です。

台湾の司法制度においては、最高裁に憲法解釈を求めることができます。大法官憲法解釈 623 号の中で、児童及び少年の売買春防止法 29 条については、的確な 18 禁のゾーニング措置がされており、売買春の情報の受け手が 18 才以上に限定される場合であれば、この 29 条の適用は違法であるという解釈がなされているにも関わらず、警察は、ミコさんの送検にこだわって無理やり逮捕し、ミコさんが安心して働く環境と生活を破壊するものです。

●障害者が買春する権利と環境の整備を!

これと同様に現行の政策によって抑圧されているのは、売る側だけでなく、買う側にもいます。買う側の中でも、社会的なマイノリティの立場にあるお客さんも被抑圧者であると言えます。たとえば寝たきり老人や、身体障害者、精神障害者などです。どうしてかというと、現在の法律ではゾーニングされたエリア外での売買春は売る側買う側ともに処罰の対象となっているからであり、もしなにかあったときのことを考えると、もしセックスワーカーが、例えば寝たきりの人や障害者の人をお客さんにとった時、何かあったときにすぐ逃げられない、そういったリスクがあることから、そういうお客さんを取りたがらないという現状があり、マイノリティ、体の不自由なお客さんに対しても抑圧的な環境を作り出していると言えます。

そういった状況に対して人民民主陣線で、今回の選挙に合衆で参加している、重度の脳性まひの頼宗育さんは、合法的な売買春の環境づくりと、ネット上での必要な情報が得られる環境づくりの双方が重要であると考えています。

(頼宗育さんの話)

「私は重度の脳性まひであると同時に障害者の買春客でもあります。私は現実空間では言語的な障害があるので、ネットを通じてしか他の人とやり取りしたり売買春の消費者としてやりとりすることができません。インターネットというのは、例えば AV をみたりするにしても、セックスワーカーのお姉さんを探すにしても、私の生活において非常に重要な役割を持っています。例えば、万華のところに姉さんをみに行ったことがあります。そのときに気に入ったお姉さんがいたの

ー台湾・日本・韓国ーアジアセックスワーカーアクションワークショップ

ですが、「いくらですか?」と聞いたら、彼女は自分が言っていることが聞き取れなくて全然相手にしてもらえませんでした。その後ネット上でのコミュニケーションを通じて、私は明確に自分の体の状態やどういう介助が必要なのか、自分の予算、好みのタイプなどを伝えたくて、消費をできるようにしました。ですから、私のような状況に置かれていて、彼女をつくることもできず、結婚もできない重度の障害者にとって、性的な欲求を満足させる上で、インターネットというのは重要なプラットフォームであり、セックスワーカーを探すことができる手立てです。しかしながら、現在、台北市政府は、売買春の合法的なゾーニングを行なうという問題に向き合わないばかりか、私に残されたわずかな可能性であるインターネットという場所さえも取り締まり、制限しようとしています。ミコさんの例のように、児童及び少年の売買春防止法 29 条を口実に、ネットでの売買春の取り締まりが行われれば、一番影響を受けるのは、街娼の人と私のような客です。これは、非常におかしいことだと思います。4 年前に国の法律ではっきりとちゃんとゾーニングすれば売買春は合法だと定められ、この間ずっと市長に対して要求してきました。そして実際の現実空間のゾーニングと共に、ネットでも適切なゾーニングをすることで、私のようなネットを通さないとほかに手段がないような消費者もたくさんいるということを忘れないでください。政策がちゃんと行われれば、セックスワーカーにとっても仕事の環境も収入も良くなるいい方法だと思います。」

●人民民主陣線の 3 つの政見

2011 年に社会秩序維持法が改正されて、ゾーニングエリアを設ければそこでは売買春は合法だけでもその外では売買

春両方を処罰する、となりました。このことは台湾において既に、合法的な売買春が可能であるという法的根拠となっており、ただゾーニングについては各地方自治体に設置はまかされていますが、その後 4 年間ずっと、いずれの地方自治体もゾーニングのエリアを設定するに至っていません。ですから現状の台湾における売買春関連の法律制度は、実質的に形式的には、ゾーニングエリアでは合法、その他のエリアは売るほう買う側両方処罰ということになっていながら、どこであっても売るほう買う側両方処罰対象となっています。こういった現状において、売買春を合法かするかどうかの責任の所在は、それぞれの自治体にあると言えます。そしてその中でも、首都である台北市は台湾全土の中で、売買春の合法化、ゾーニングをめぐる議論をおこなう上で、最も条件がよく、さらにリソースが恵まれている都市といえます。ですから、柯文哲市長は一日も早く売買春の合法化についての社会的な議論を進め、合法化を実現させ、台北で働いている街娼の人たちに合法的に仕事ができる場所を提供しなければならないと主張します。これを私たちの人民民主陣線の政見 3 点にまとめました。

- 1、売買春を合法的に行うゾーニングのエリアの設定を実現すること
- 2、バリアフリーの売買春を可能にする環境づくり
- 3、どこで売買春のゾーニングを行なうかについて、地元の人々と十分にコミュニケーションをして共に対等に話し合い決めていけるルールづくり



真ん中にあるのが街頭行動をともにする障害者の頼さん

台北市内で街頭行動する COSWAS メンバーたち。写真の一番左のピンクの看板に書いている「羊頭狗肉」というのは、飲み屋やマッサージ屋などでセックスしないと掲げてても実際にはセックスサービスをしているという意味を表現している。

黄金町の歴史と現在

報告:2 松沢呉一 日本

(松沢呉一のビバノンライフ
<http://www.targma.jp/vivanonlife/>)

みなさん、こんにちは。私は雑誌やインターネットや本で原稿を書く仕事をしています。専門はいろいろとあるんですが、性風俗の法規制や歴史に強いと自認しております。

さきほどから話に出てますように、黄金町という場所があります。性風俗産業を潰した失敗を台湾に輸出しようとしているよからぬ人たちがいるというのを聞き、黄金町の実態はどうなのかを今日お伝えしに来ました。

●横浜の街について



まず、黄金町というのがどういうところかをお話します。黄金町は京急線という鉄道の沿線にある街で、東京の横にある神奈川県横浜市の中にあります。横浜は古くからの港町ですから開放的な場所で、外からの人々を受け入れ、性風俗産業も昔から盛んでした。

横浜の真金町（まがねちょう）は遊廓があったところで、戦後は赤線になります。ここには歴史的建造物もあったのですが、今はほとんどその面影はなく、辛うじていくつかのラブホテルがあるくらいです。

そのすぐ横にある曙町は通称「親不孝通り」と呼ばれ、戦前から飲み屋が並んでいました。戦後は青線と呼ばれる地帯で、今はヘルス街になっています。ヘルスは本番のない性風俗店で、ソープランドは福富町というところに集中しています。

公娼である遊廓とは別にチャブ屋と言われる売春ホテルも横浜では発達します。これはジャズをバックにダンスもやり、

売春もやり、という日本では珍しい洋風の売春ホテルでしたが、この場所は敗戦後米軍に接收されて、返還された時には跡形もなくなっていました。

それらと違い、黄金町は歴史的には歓楽街ではありませんでした。簡単に言うと、貧民窟です。港では港湾労働者と言われる人たちがそれにまつわる運搬などの労働者たちが集まります。風太郎と呼ばれる人々です。それらの人々が住み、宿泊する施設がここにはあり、大岡川の上の船上ホテルが宿泊所として利用されます。戦後火災のために死傷者が出て一掃され、今はこれありません。

戦後はヒロポンなどの麻薬を売買する場所としても知られていました。この頃から下層労働者向けに売春をする女たちがいたらしいのですが、歓楽街は別に多数ありましたし、戦後の横浜には進駐軍の兵隊が闊歩し、街娼も多く立ったため、一般には売春の街としての認知度は低かったと思います。

●黄金町ピーク時の売春の状況

細々と売春がなされる時代が続くのですが、1980年代くらいから徐々にこの街は売春スポットとして知られるようになっていきます。外国人の売春婦が増えていき、欧米の飾り窓スタイルで客を引く売春街として知る人ぞ知る街になります。

2000年頃になると、ちょうど文萌楼と同じくらいの狭い部屋が2階にある250軒のお店があり、500人の女性が働いていました。

女たちの出身国もいろいろでタイ、コロンビア、中国、台湾などから来ていて、ほんの一部ですが、日本人もいました。

黄金町での働き方は日本の売春業態の中では珍しいものでした。ヨーロッパでは当たり前だったりするのですが、日本では珍しく「部屋貸し」というものです。つまり雇い主がない方式です。

家賃は場所によっても違ったようですが、私が仲良くなった台湾からの女性らが働いていた物件は、1日2万円だと

言っていました。交渉次第で安くなったりもしますが、客が払う料金は20分で1万円というのが相場だったので、2人お客さんがつけば、それ以降は全額自分のものでした。

ひとつの物件で部屋がふたつありますから、2人働けば4万円です。

黄金町というのはそんなに便利なお店ではないので、月に3～5万円程度で借りられるような物件をフル稼働した場合、月に120万でワーカーたちに貸していたわけですから、家主は当時べらぼうに儲けていました。

日本では売春は非合法で、非合法業種にはしばしばヤクザがからんできて、黄金町でも関わっていたわけですが、物件のオーナーから金が流れているだけで、直接彼女たちは金を出しているわけではありません。結局は自分たちが稼いだ金が流れるわけですけど。

こういうシステムだったため、家主は仕事内容に口出しはせず、すべて自分たちで決定します。「今日はもう利益が出たから帰ろう」と早く店じまいをするのもいましたし、気に入った客とは金をとらずに朝まで一緒にいることも自由。一方で、稼ぎが足りず、深夜まで客を待つものもあります。もっと広くてきれいなホテルに移動するのもあります。

働く側にとっては自由度が高い方法と言えますが、この方式は、セックスワーカー自身が売防法違反で逮捕されるリスクがあります。日本では売防法で、勧誘が禁止されているため、自身で勧誘しない限りは逮捕されませんが、店が客を呼んでくれるわけではないため、この方式では自身で客を引っ張るしかないわけです。

そのこともあって、また、日本人は自身ですべて決定する自由を好まないこともおそらく関わって、この方式が日本人セックスワーカーの間で成立している地域は極わずかです。しかし、外国人がほとんどだった黄金町では成立していました。

●黄金町浄化（2005年）に至るまで

黄金町浄化の前史として1989年、横浜博覧会（みなとみらい21地区で、横浜市制100周年、横浜港開港130周年を記念して開催された博覧会）をはじめとしてみなとみらいという計画が始まりました。広くはここから再開発が始まったと言えます。

もうひとつ、決定的な前史として、2003年に石原都知事というとんでもない奴が始めた浄化作戦というのがありま

す。その時の竹花豊副知事は警察庁から出向して、浄化作戦を主導したあと、副知事を辞めると警察庁に戻ります。この人は、性風俗産業をなくせば世の中がよくなるかと本当に信じている人らしいです。

この人が警察庁に戻って、こんどは警察庁から全国的に浄化を広げる動きが起きてきます。

この時にさまざまな点で今までないことが生起していくのですが、セックスワーカーにとっては決定的な転換がありました。さきほどお話ししたように、街娼がお客さんに「遊ばない？」と誘いかけたり、インターネットで客を募集すると、売防法にひっかかりますが、それ以外では参考人として引っ張られるだけでした。女という属性は社会の保護対象という考え方からです。これ自体が差別的な発想ですけど、ともあれ、捕まりにくい、つまり前科がつきにくいという点では、ワーカーにとっては有利ではありました。その分、自立を奪われてしまったとも言えますけど。

ところが、この浄化作戦では、違法な風俗店であることを知りながら働くと、風営法違反の幫助で捕まるようになったのです。あまり表には出ませんでした。この時に多数の風俗嬢が逮捕され、前科がついています。

この方式は大阪などでも採用されて、もはや風俗嬢は捕まらないという時代ではなくなりました。

そして、東京歌舞伎町浄化の2年後の2005年に黄金町でも本格的な風俗摘発が始まります。歌舞伎町の時と同じで、当初業者は「そのうち終わる」とも思っていたのですが、警視庁と同じく神奈川県警も徹底的な取り締まりをして、売春街、黄金町は壊滅します。

売春ができなくなったので、一日2万円でセックスワーカーたちに部屋を貸した家主たちは、レンタルマンション、レンタルルームという形にして、たとえば一日千円とか2千円とかで貸し出すようになりました。本来のリーズナブルな価格になったわけです。

それでも物件の数が多いのと、そんなに便利なお店ではないので、あまり活用されることはなくて、風体のよろしくない長期の旅行者や何をしているのかわからないような人たちが出没するようになって、今度はこれによって「風紀が乱れた」と言われるようになります。



(現在のレンタルルーム)

●初黄・日ノ出町区域のまちづくり計画

ここから出てくるのが「黄金町バザール」というものです。一回目は 2008 年のことです。浄化作戦から 3 年間間が来ていますよね、つまり浄化作戦は、黄金町をただのゴーストタウンにただけであって、売春がなくなれば街がよくなるなんてことはありません、ただの幻想だったことを明らかにしたわけです。

この失敗の後にできたのがアートで、浄化作戦の失敗をごまかすように出てきたものです。

これは高架下ですが、2008 年から、こういうところにステージをつくったりスタジオやギャ

ラリーをつくっていくという計画が出てきて、アートを活かした新しい街づくりが始まり、「黄金町バザール」というアートフェスティバルが始まります。

これがバザールに参加しているギャラリーですが、参加ギャラリーは全体で十数ヶ所のみです。250 軒あった売春施設の数を考えればわかりますが、とにかくしょぼい。暗闇にポツリポツリと小さなギャラリーが点在しているだけで、もっとも派手なのは、駅前の看板かもしれない。黄金町の中は、人通りもなく、まったく盛り上がりません。夜は店の光もないですから、ちょっと怖いくらい。

これを主催する特定非営利活動法人「黄金町エリアマネジメントセンター」が 2009 年にできるのですが、山野真吾という人がトップで、この人が黄金町のアートの街づくりを台湾にもってこようとしている人です。

横浜市の税金を結構使って、高架下やまわりのたくさんの物件を使って、アーティストやお客さんをたくさん呼んで活性化しようというのが当初から現在の目的ですが、それがどうなったかをみてみたいと思います。

これは小さい飲み屋さんです。今黄金町の中に 10 軒くらいあるのかな。「黄金町エリアマネジメントセンター」と無関係にやっている店は知ったことではないとして、「黄金町エリアマネジメントセンター」のからみでここに入っている

店は、儲かるものをやるなという暗黙のルールがあるそうです。なんで儲かるものをやっちゃいけないのかさっぱりわからないのですが、地元で囁かれているところでは、最終的に全部追い出そうとしているのではないかとされています。儲かっていると出ていかなくなる。

もうひとつのルールがあります。性的な表現はアウトなのです。ブラジャーを模した作品を公開したらアウト。アートだとしても性が匂うものはアウトなのです。

日本ではピンクはエロの色なので、ピンクを使った風俗店が多いのですが、風俗でなくマッサージのお店でピンクの看板を出したところ、追い出されたりしています。ピンク色も使えない街になってしまった。

「黄金町エリアマネジメントセンター」が何を考えているかさっぱりわからない。少なくともはっきりしているのは、歴史を重んずる気などまったくないことです。

すでにネットから消えてますが、第一回目の「黄金町バザール」の説明文では、ここには「特殊飲食店が軒を連ねていた」と書いていました。「特殊飲食店」略して「特飲店」というのは赤線の店のことです。おそらく「黄金町エリアマネジメントセンター」には、一人としてこの町の経緯を正確に把握している人はいなかったのでしょうし、特飲店がなんのことかもわかっていなかったわけです。気分で言葉を使っただけ。歴史なんてどうでもいい人たちの集まりだったことがわかります。

彼らはアートもまたどうでもいいものだと思っていることは間違いがない。さもないと、アートから性的な表現を消してしまえなんて馬鹿げた発想をするはずがない。

アートを利用して性風俗の匂いを消したいだけで、アートに理解があるわけではないし、文化の理解があるわけではないのです。

アートも歴史も文化も理解できない人たちが税金を引っ張ってきただけで、その試みも私が見たところ、100% 失敗しています。都市部では珍しく静かな暗がりを体験できる場所、お化け屋敷に行かなくても怖がれる場所を創り出したのがあえて言うなら彼らの貢献じゃないでしょうか。

そういう町になったことの結末として、ギャラリーの中で



強姦事件が起きています。それだけ人がいない街なのです。「黄金町エリアマネジメントセンター」はこの事実を隠そうとしています。億単位の税金を使って招いたのは文化ではなく、強姦犯だったわけですから。

こういう人たちですから、台湾に来てても都合の悪いことはすべて伏せて、都合のいいことしか言っていないと思うので気をつけてください。

このような浄化が招くのは、街の死です。歌舞伎町は最近では表面的には賑やかさを取り戻しつつありますが、この十年ちょっとの間に、性風俗店だけではなく、多数の店が潰れ、コミュニティが破壊されました。性風俗店が集まる場所には、キャバクラやバーが栄え、喫茶店や食べ物屋も栄えます。客たちはそこで飲みもするし、食べもする。友だちと待ち合わせもする。風俗嬢や従業員も同じです。食事は出前も取りますし、喫茶店で打ち合わせや面接をする。仕事のあとは飲みに行ったり、カラオケに行ったり、サウナに行ったりする。周辺に住むのも多いわけですから、マンションの需要も増えます。

性風俗というのはいろんな産業とリンクをしていて、性風俗がなくなると周りの産業も潰れてしまう。自然界と同じで、害虫を減らしたら益虫までも減ったり、害虫がいなくなったから別の害虫が出てきたり、今まで益虫だったのが数が増えすぎて害虫になったりもする。

そういうことが黄金町でも起きています。今はもう電気も点いていない暗い駅前の状態になっています。

では、セックスワーカーたちはどうなったかということ、マンションの中の見えない場所で商売を続けています。確認がしにくいのですが、彼女たちが集まるクラブがあり、客はそこに行って交渉するという話も聞きます。黄金町から少し離れた路上に今も立っています。ようは周辺地域に散り散りになっただけです。



(暗い駅前の様子)

●黄金町の現在のセックスワーカー

アートの街づくりは完璧に失敗しました。年間億をつぎ込んでもアートで街を復興させることはできませんでした。む

しろ街を殺したのです。売春業は見えにくくはなりましたが、消すこともできませんでした。

アートに利用価値があると思っただけのことで、アートの理解はまったくないですから、表現に対して他では考えられないような規制をやってくる。国家権力でさえも恥ずかしくてできない規制を彼らはやる。

アーティストにとっても最悪の計画だということです。性的なものをなくすためにアーティストを利用するのはアーティストを愚弄しています。アートから性を消すのは、アートを否定することでもあります。それができると思っているような人たちです。

横浜市としても、いつまでもこんな馬鹿げたことに税金を投入するはずもなく、おそらくこのまま黄金町は、地価が落ちたところで大手のデベロッパーが土地を買い漁って、大きなマンションを建てたり、ショッピングセンターでも建てるしかないのだと思います。

「性風俗店を追放しろ」という公序良俗を求める住民たちや宗教団体、保守派の婦人団体、そしてこれに協力しているアーティストたちは、土地で商売をする人たちの地ならしをただで終わることになりそうです。

そもそも、黄金町には物としての文化財はありませんでした。性風俗そのものが文化財とすることは可能だとして、建物とか物としての文化財はなにもない。安くて新しい建造物しかありません。プレハブのようなチープな建物は今も残っていますが、その中身を潰したことが、こちらの古跡を潰す名目になるわけなく、そんなことを言ったらお寺とか全部潰していいということになりかねない。

とんでもない飛躍だと思いますが、その飛躍のムチャクチャささえ理解できない日本と台湾の人たちが手を組んでいるでしょう。

自国の歴史さえ理解できない人たちに台湾の歴史が理解できると思いますか？ 自国のアートさえ愚弄する人たちに、他国のアートが尊重できると思いますか？ 街を愛していない人たちに街の復興ができると思いますか？ そんな人たちが台湾で教えられることは何ひとつありません。



(バザール開催期間中の閑散としたギャラリー)

韓国における売春政策とセックスワーカーの権利

報告:3 Giant Girls 韓国

●韓国のセックスワーカー運動の始まり

韓国のセックスワーカーによる運動は、2004年に制定された性売買特別法に反対する動きから始まりました。

運動によって視覚化されたセックスワーカーの声というのは、生存権と労働の権利の要求、セックスワーカーは犠牲者ではなく主体であること、セックスワークは犯罪ではなく労働であることです。こうした運動は当時、民主性労働者連盟（※1）と全国性労働者連帯（※2）によって展開されていきました。

（※1:2009年夏まで活動。一部のメンバーが現在の Giant Girls 結成。）

（※2:現在の Han-Teo）



セックスワーカーの権利獲得のためには、セックスワーカーを労働として認めること、つまり労働の種類の階級化への抵抗、セックスワークの非犯罪化（法律の正当性を正す）、セックスワーカーへのスティグマ（汚名）を排除すること、家父長制的なセクシャリティの考え方への批判が不可欠です。

民主性労働者連盟による12の声明を紹介します。

1. セックスワーカーの生きる権利を守るために闘います
2. セックスワーカーの労働の権利獲得のために闘います
3. セックスワーカーの人権侵害を止めるために闘います
4. セックスワーカーの健康を守る権利のために闘います
5. 犯罪者として男性の顧客が扱われることに反対します
6. セックスワーカーと売春宿主との間に道徳的で民主主義的な関係性を求めます

7. 私たちは人身売買、監禁、暴行を含めたすべての性売買犯罪に反対します

8. セックス産業に残るか立ち退くかは私たちセックスワーカー自身が決めます

9. セックスワーカーを抑圧する「性売買特別法」に反対します

10. 私たちは国内で民主主義的なセックスワーカーの連帯を続けていくことを努力します

11. セックスワーカーの運動の目的とその要因を重視する民主的な人たちやグループとの連帯を促進します

12. セックスワーカーに反対するフェミニストたちの固定観念を変えていくことを決意します

●性売買特別法制定の背景

性売買特別法がつけられたきっかけは、2000年に起きた郡山火災事件でした。この火災事件により、業者に監禁されていた5名のセックスワーカーの被害者が亡くなられ、経済的な搾取の問題が背景にあったことが明らかにされました。それ以来セックスワーカーの人権に対する関心は高まり、女性団体がセックスワークを禁止する法律制定を求めました。

韓国政府は TIP(Trafficking In Persons 米務省が発行する人身取引報告書)により、セックスワークを人身売買と定義づけました。

●性売買特別法の効果

法律ができてから、売春宿の規模と数が減少しました。その結果、売春宿以外の性産業の種類も増加し、国外に出稼ぎに行く移住労働セックスワーカーが増えました。オンラインでの売春ビジネスも拡大しています。

また、警察による人権侵害、スティグマ（汚名）の集中化や、顧客との関係においてセックスワーカーの地位が低くみられるようになり、セックスワーカーが弱味を握られやすくなる

ことによって犠牲になっています。

そして、セックスワーカーの健康と安全への悪影響も看過できません。それは、可視的でなく、危険な場所でセックスワーカーが働かなければいけなくなったことです。コンドームを使用することが不可能になり、結果的にエイズ感染への危険性が高まりました。

●元売春婦の救助と売春禁止に関する政策

女性省と女性団体は連携して、女性のセックスワーカーの犠牲者化を図るため、セックスワークに対する更なるスティグマを増加していますが、非現実的救助は、セックスワークへ戻る率を上昇させているだけです。

売春禁止政策では、警察による取り締まりで、セックスワーカー、エージェント、顧客を罰則化し、売春宿の閉鎖により性産業の規模を縮小しようとしています。

特に、性売買特別法と都市開発の結託による、セックスワーカーの労働場所のジェントリフィケーション（強制的な移動）と、他の種類・形態の性産業の増加が顕著です。



（例）'Chungnyangni' 地区での道路の私有化、'Yongsan' と 'Chunhodong' 地区における複雑化されたビル群、'Youngdeongpo' 地区のショッピングセンター街、'Hagikdong' 地区のアパート層

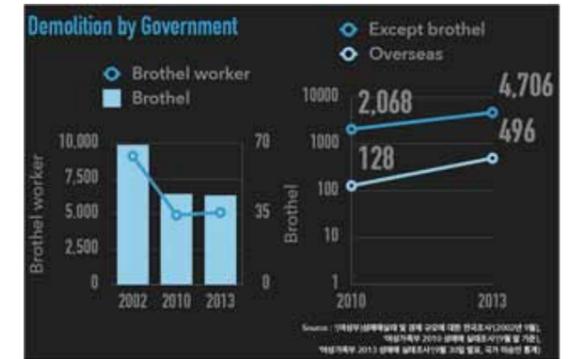


都市開発政策に反対するセックスワーカーたち



●政府による売春宿の駆除

約10年間で多くの売春宿が潰されたため、売春宿で働く人の数 (brothel worker) は半分に減りましたが、一方で、売春宿以外 (except brothel) で働くセックスワーカーの数や国外に出稼ぎに行く人の数 (overseas) は倍以上増えました。



●韓国における現在のセックスワーカーの運動体

現在韓国には2つのセックスワーカー団体があります。一つは Han-Teo で、売春宿で働くセックスワーカーの団体です。売春の合法化の要求、赤線地帯地域の必要性、セックスワーカーの生存権にフォーカスして活動しています。

もう一つは Giant Girls で、セックスワーカーの権利ネットワークとして、セックスワーカーの非犯罪化の要求、売春宿以外の他のセックスワークの種類を認知、セックスワーカーに対する汚名（スティグマ）を取り除く文化的な運動をしています。韓国におけるセクシャルマイノリティグループや文化グループ以外は地元でのサポートは少ない一方、国際的なセックスワーカーの団体からはよく知られています。

売春宿のセックスワーカーの闘争のピケ



クィアパレードでのピケ

エピローグ 東京で経験したこと、台北で体験したこと

文・松沢呉一（ライター）

韓国や台湾の直接的なレポートは、それぞれの項目を見ていただくとして、ここでは極私的な台北でのワークショップの感想を書いていくことにする。

●浄化作戦の頃

2013年から翌年にかけて、東京およびその周辺、また大阪等の都市では、浄化作戦の名のもとに違法な性風俗産業を一掃すべく、警察の摘発が続いた。

ここでの「浄化」はあくまで警察や行政による見方に過ぎない。現実には風俗雑誌や求人誌、インターネットによって情報が流れ、働く者にとってはより稼げる店、より自分に合った店を探しやすくなり、競争原理が働いて、また、メディアもサポートして、悪質な店は排除される方向にあった。

つまり、現実には浄化は進んでいて、所轄の警察でも、そのことはわかっていたはずなのだ。だから、18歳未満の雇用などの容疑がない限りは、風営法に反する店でも警察は黙認してきた。「浄化作戦」は、その現実の浄化の流れを断ち切るものでしかなかった。

なぜこの段階で浄化作戦を実行したのかについてはわからないことが多いのだが、ひとつの要素としては「店舗型から無店舗型へ」という流れがある。

1998年の風営法改正によって、無店舗型性風俗、つまり出張の性風俗が合法とされた。今まで認められなかった新ジャンルが認められたのだから、これだけを取り出せば合法範囲が広がったと言えるのだが、この改正は「店舗型性風俗をなくす」という方針に沿ったものだと見ることもできる。つまりは「人目につかないところでやれ」と。事実、「浄化作戦」の中では、風営法の許可を得ていながらも、些細な条例違反で摘発され、その際に「営業をやめろ」と脅されて、店を閉めたヘルス店も存在している。

この「浄化作戦」は、働く者たちの立場に立ったものではないことは明らかで、違法店で働いたことをもって「風営法違反の幫助」を適用されて多数の逮捕者が出ている。また、店舗型から無店舗型に以降したことによって犯罪も増加した。

台北でこの話をした時に、「反対はしなかったのか」と聞かれて、苦しい思いをした。私は私なりに反対の文章を多数書いていたし、弁護士にも相談をして、「浄化作戦は不当ではないか」と聞いたりもしたのだが、今までいかに黙認してきたとは言え、現に違法である以上、摘発は正当。また、違法であることを

知りながら働いた場合に、幫助の適用を覆すことは難しいだろうとのことだった。

あとはメディアに期待するしかないわけだが、ほんの一部のメディアのみがこれを疑問視しただけで、いままでさんざんそれらの店を記事にして金を儲けてきた雑誌もほとんど「浄化作戦」を批判することはなかった。

私自身、原稿を書くことで精一杯。あとは知り合いの風俗嬢たちに「許可店に移れ」「東京をしばらく離れろ」とアドバイスをしたり、逮捕されて自殺未遂を起こした風俗嬢を慰めるくらいしかできることはなかった。

当事者たちも、店の人たちも情報を集めて、目の前の事態に対処するくらいしかできず、すぐさま抗議行動をし、抗議声明を出せるサポートグループの存在が必要だったのだと思う。SWASHもまだ安定した活動をするには至っていなかったはずだ。

●風俗ライター廃業

この時の挫折感が強く、私は敗北宣言を出して、「風俗ライター」という肩書を捨て、以降、性風俗産業の取材はほとんどやらなくなった。この「浄化作戦」も関わって、そういった記事が書きにくくなったり、その手の雑誌が減ったということもあるのだが、「もういいや」という思いがあった。

その数年前には、セックスワークの非犯罪化の主張を積極的に展開もしていたが、それもまったく広がらず、相も変わらぬ道徳的セックスワーク否定、性風俗産業否定がまかり通る現実を前に、無力感に苛まれたということもある。そして、メディアも味方にはならないことを思い知った。

以来、性風俗の話題は、積極的に取り組むことがなくなっただけでなく、「触れたくないもの」にさえなっていた。風俗嬢や従業員たちもつながりが断ち切られ、あの頃から連絡が途絶えた者たちもいるし、私自身が連絡をとらなくもなった。

かつてはプライベートでも行っていた性風俗店には近寄りなくなり、関心も抱かなくなっていた。抱かないようにしていたと言うべきか。

昨年のこと。新潮社が「街娼のインタビューを文庫にしませんか」と言ってきた。これも風俗ライター時代にこつこつと続けてきたものだ。日本人街娼たちはほとんど街から消えている中、記録を残しておきたいと思い、インタビューを続けてきたのだが、

これも風俗ライターを辞めるとともに頓挫してしまい、そのまま忘れ去りそうになっていたものだ。

その編集者は当時それを読んで本にしたいと思ったそうだが、その頃は力がなく実現せず。今は自分の判断を通せるくらいの立場になったので、改めて出したいと考えた。

このまま忘れられてもいい仕事だとも思っていたが、形にすることがインタビューに答えてくれた人たちに報いることかもしれない。

セックスワーカーの中で、幫助ではなく、実行犯として逮捕される業種がいくつかある。たとえばストリッパーは公然わいせつになる。AV嬢や男優が屋外での撮影をする場合も公然わいせつになる。そして、街娼は売春防止法の勧誘で逮捕される。事実、多数の街娼たちがこれまで逮捕され続けている。

また、街娼はもともと人目につきやすい職種と言える。不特定多数の人の中から客を自分で探さなければならない仕事だ。そのため、好奇の視線、蔑視の視線を受けやすく、時に罵倒もされ、嫌がらせもされる。

だからこそ、私は彼女たちは、もともと闘っている人たち、もともと反逆している人たちのように見える。なかなか理解してくれる人たちはいないのだが、カッコいいのである。

日本が戦争に負けたことによって、街にパンパンが溢れた。女たちは社会に向かって、あるいは日本の家族制度に向かって反逆した。これは私だけの見方ではない。当時、そういう「パンパン評」を書いている人もいるのだが、いつの間にかパンパンたちは「戦争被害者」としての側面から描かれるようになってしまっている。「哀れな意思なき女たち」というわけだ。

この歪められたイメージを真相に戻すのがこの文庫『闇の女たち』である。

●そして、台北へ

この作業をやっている時に、SWASHから台湾行きの話がもちかけられた。正直もうこういう運動にも興味を失っていたところがあって、外圧でしか動けない国ニッポンで、何をしても無駄、何を言っても無駄との諦観があった。

しかし、『闇の女たち』をまとめる作業で、ひさびさに闘うおねえさん方の言葉に触れていたため、「よし、行くか」と決意。日本で起きた不当な「浄化作戦」が台北に「輸出」されつつあるため、その実情を伝えることが役割であった。十数年前の悔しさを吐露することで、その再現を防ぎたい。

第一稿の作業を終わらせて、12月、台北へと向かった。「いつでも行ける海外」である台湾は、わざわざ行こうと思う機会がこれまでなく、今回が初めてである。その6日に大きなものを受け取ることができた。「台湾はメシが安くてうまい。とくに果物が

おいしい」「台湾の人たちは親切」「北投温泉は湯温が高い」「夜市は楽しい」といったものも受け取ったわけだが、なにより台北公娼廃止反対闘争やCOSWASの姿勢から多くを学んだ。

この間、一貫して活動を続けてきたことの意義。路上での行動も続け、組織維持の資金を確保し、国内の、また国外のネットワーク作りを確立してきたことなどなど、あらゆる点で刺激されるところがあった。

COSWASの活動は中国、韓国、日本での活動を活発にする意義もあり、同時に、日本においてはSWASHの存在意義を強く感じた。SWASHの前身であるUNIDOSは、台北での運動に触発されて、非犯罪化を求めるために動き出した団体だったが、日本で非犯罪化を求めることの難しさに直面して、SWASHはセックスワーカー対象、業界対象の活動を主にする方向に転じた。そのため、外向けに目立つ活動をしてきたわけではないが、その内面には今も台北の公娼運動の精神が生きている。

SWASHがなければ、東アジアのネットワークに参加するに適した団体はなかったかもしれず、SWASHもまた活動を継続してきたことに感謝した。

COSWASにも参加している街娼たち、萬華の街娼たちの姿は私が戦後の焼け跡に立つパンパンたちの姿そのものだった。カッコいいおねえさんたち。この時期に『闇の女たち』を出すことになったこと、そして台北に来たことは、何か意味があるのだろうかと思わないではいられなかった。

●この国は何も変わっていなかった

日本に戻ってきてから、HIV啓発のための「おっぱい募金」に対する批判が巻き起きる。衛星放送であり、夜の十時の放送というゾーニングがなされた放送であったが、事前の告知、画面でのレイティング表示など、さらに徹底したゾーニング対策が必要ではなかったかという議論はあっていい。

しかし、ゾーニングされていたことは無視され、根拠もなく募金された金が不正流用されているかのようなことを喧伝され、ありもしない虚構の違法性を弁護士たちが次々とあげつらって非難。かつて我々が批判してきた「比肩することができないにもかかわらず、セックスワークを臓器移植にたとえて自己決定を否定する愚論」「当事者の意思を無視して、強制されていたとする傲慢」「自分の娘にやらせたくないとするパターンリズム」などがまかり通るに至って、この十数年、何ひとつ世間の人たちは変わっておらず、家父長制に基づく道徳を内面化したままだったことに気付かされた。

道はあまりに遠い。もし台北での経験がなかったら、すでに私は諦観に襲われていたと思う。しかし、台北の経験を経由した今は、「よし、一からやるか」と決意を新たにしている次第だ。